

■失なわれた心——水上 勉

失なわれた心

水上 勉

文和書房

失なわれた心

昭和45年9月20日 初版印刷 至 460
昭和45年9月25日 初版発行

著 者 水 上 勉
発行者 川 上 和 秀
印刷者 多 田 基

発 行 所 株式会社 文 和 書 房
東京都文京区小石川3-1-3 TEL 東京 (813) 6541 (代)

© 1970

製版・山口活版所 製本・岸田製本

失なわれた心・目次

1

生きるということ 8

人生の大学 24

安心立命 26

盲目の人たち 30

吹雪の死 33

母子心中 35

母のこと 39

私の正月 41

「一日成さざれば一日食えず」 45

2

勇気の要ること 52

失なわれるもの 65

手づくりのかなしみ 70

横瀬夜雨の里 74

二つの旅 77

背骨のまがり 81

根性について 86

眼について 88

「愛する」ということ 91

3

マイホームの墮落 96

情操をはぐくむ 111

根はどこにあるか 121

4

困ったことだ 128

人を地上へ 132

地獄の季節 145

障害者の怒り
155

5

若狭の山と海
170

衣笠山・等持院
182

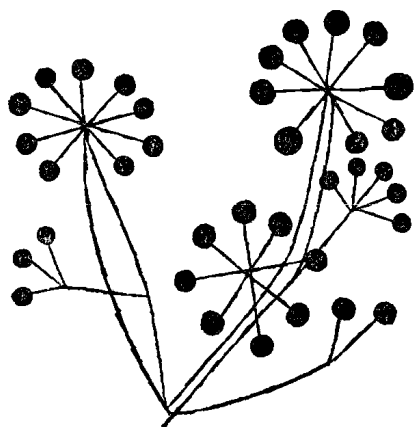
6

おえん
188

石山の人
198

装
幀
櫻
井
幸
太
郎

1



生きるということ

小さい頃、母はよく、谷の奥へ私をつれて行って、蓑一枚ぐらいしかない小さな田の畦にす
わらせ、自分は胸までつかる汗田しわたで苗を植えていた。この谷は暗くて、一日に陽が三時間ほど
しか射さなかった。村でもきわめて貧しい谷であった。そんな谷の口に私たちの家があった。
谷には畑があった。そこで、母は芋や大根を培つちかった。ここへゆくのに、深い川が一つあった。
木橋がかかっていたが、大水のたびに橋はよく流失した。で、母はよく橋普請はしおしんした。自分だけ
の働く谷だから、村の衆にたのめる工事ではない。宮大工の父がその日は必らずどこからか帰
ってきて、山から丸太を二本伐ってきて、せまい川にさしわたし、その上へ栗材のコロをなら
べて、流土を積むと、私たち兄弟にも踏ませて赤土の固い土橋にした。一年ほどすると土橋は

古ぼけてわきに草が生え、草の下に、神社の軒タルキをみるような、栗材の切口が白くならんだ。また、これが古くなると、栗材はくさって、のぞくと橋の裏は椎茸しいたけがいっぱいだった。母はよく、これを穫ってきて煮て私たちの弁当のサイにしてくれた。母は、自分一家の収穫のための谷田へわたされた橋を、その生涯に何ど架けただろう。若狭はずいぶん台風のすぎる所だから、おそらく十回ぐらいいは架けたと思う。いつ架けても、この橋は丸太の切口の上に土のもられた、椎茸のみのる橋であった。

私は、九歳でこの母に別れた。京都の寺へ小僧に出たからだ、故郷のことを思うと、母の架けていた橋が臉にうかんだ。今日も、それはうかぶ。旅をしていて、汽車が、似たような山の谷をすぎると必らずうかぶ。ああ、日本という国は、どうして、こんなに似た谷や山が多いのだろう。青森でも、四国でも、九州でも、わが在所の谷と似た谷をみた。それらのいずれの谷にも、奥へゆくと、小さな橋が架かっている。

ささやかな、みのりのために、母が心つくして架ける橋、それは、私たち一家の主食を得るための、つまり、命の橋であった。だのにどうして、あの橋は、あれだけ粗末に出来ていて、美しかったのだろう。

今日、村上華岳や富岡鉄斎とまでゆかなくてもいい、田舎絵師の描いた山水画を見てさえ、そこに、丸太の切口のみえる草のはえた橋が描かれていると、つい涙ぐんでしまうのだ。

熱田の精進川に裁断橋という古い橋が架かっている。そこに、次のような彫字のある青銅の擬宝珠がある。銘文は次のようにみえる。

てんしろう十八ねん二月十八日、をたはらへの御ぢんほりをきん助と申、十八になりたる子をたたせてより、又ふためともみざるかなしさのあまりに、いまこのはしをかける成、はゝの身にはらくるいともなり、そくしんじやうぶつし給へ、いつかせいしゆんと、後のよの又のちまで、此かきつけを見る人は、念仏申給へや、卅三年のくやう也

小田原の陣に豊臣秀吉にしたがって出陣して死んだ堀尾金助という若者の三十三回忌の供養のために母が架けた橋である。いまこの橋は、人びとの商工の道のために恩恵をほどこして残存する。私がこの橋に泣いたのは、ずいぶん前のことだが、読者はこの私をセンチメンタ

ルだと思われるか。

誠実な心情によって架けられた橋は美しい。とりわけ、ここ裁断橋の銘文は、日本人ならはらわたを刺されずにはおられまいと思う。

はじめにこんなことを書いたのは、科学文明が月旅行を予測させるほどすみ、日本の道路に架けわたされる橋もみなコンクリートで、東名高速や、他のハイウェイをみてもわかるように、巨大である。道路を、鉄道を、川を、町を股いで、レジャーに生き急ぐカー族のためにある。コンクリートの橋も、大勢の工夫たちの力を集めてつくられた。何々組の請負というものの、じつは、この工事が、青森や、秋田から農閑期を利用して出稼ぎにきた、若者たちの土の手によってつくられていることを思えば、やはり、文明の架橋も、裏には椎茸こそ生えないが、働き手の哀話につきぬように思う。これは、こんど千里ヶ丘で開かれた万国博の、化物屋敷や石油コンビナートを連想させるあの建物などの場合もそうである。前衛芸術家たちの手すさびの図面をみて、じつは汗して働いた北海道開拓村の出稼ぎ者が土の手でつくったことを記憶する人は少ない。開会式の前日に、工事で死んだ三十幾人かの慰霊祭があった。それらの遺

族が、みな、私の母のような、田舎者の顔をして列席して、おいおい泣いていたのを、私はテレビでみて、落涙している。

数寄屋橋という東京の銀座と有楽町のあいだに架けられていた橋がある。つい、先年までは、そこにドブ川のような濠があった。いつか、この濠は埋められたが、いま、この橋ならぬコンクリートの近代道路を走る車の中にあつて、濠に埋まっている松の木のことを考える人は少ない。じつは、あの川を埋めるのに、石ころや屑物や土壌を投げこんで盛りあげ、それにセメントをかぶせ塗ったと解する人も多いだろうが、そんな生やさしいものではなかった。あの川は、昔からあつた。あれは川であつた。濠とはいうものの、流れていたのである。あの流れの底に、近代工学は、数万本の松の木を立杭式にならべて埋め、その上へ砂土をもりあげて、今日の道路をつくっている。コンクリートではくさるからである。松の木は、水につかれば、数百年はそのまま生きているといわれる。そのことは、飛驒高山や萩の町の、古い民家の柱や、木を見てもわかることだし、奈良や京都の寺院をみてもわかることだ。長命なものは、すべて、生きた木がつかわれているのである。

はなしついだが、丸之内に三菱通りといわれた赤煉瓦のビルが昔はあった。あれは寿命が長かった。しかし、煉瓦造りはみにくい、といって、いま近代風な高層ビルが新装あらたに道ゆく人の眼をうばわせている。しかし、あれはみなコンクリートであって、松の木よりも寿命の短かい代物しろものである。古いビルや、戦後早々に建ったコンクリートビルをみてみるがいい。廃墟とまではゆかなくとも、哀れな荒廃をみせてしまっているではないか。2DK、3DKとい、人びとはマンションを求めて血まなこだが、じつは、この頃の内装用の壁板は、すべて合板故に、あれに火がつくと、毒ガスだ。煙を喫ただけで昏倒してしまう。寿命の短かいコンクリート文明は、消防庁のいう木造否定とは皮肉な裏面を露出していて、恐ろしい毒ガス発生源の家屋構成だといったら言いすぎだろうか。私は十年前に建ったコンクリートの中程度のアパートに友人をもっているが、そこをたずねると、漬物桶の匂いと、水あげの力不足による給水の不完全設備のために、空中に現出したスラム街のように糞くさいのに驚かされる。だが、友人は、越さない。ローンがすんでいないからである。

都市化の波に農村も洗われてゆく。その都市化とは、人口移動ももちろんあるけれど、手っ

とり早く言えば、コンクリート建ての工場や住宅の進出である。合理化された農田経営は、手不足や、労働意欲のないわがまま百姓の物ぐさを助長して、アメリカでは毒ガスとして戦争用につかわれていたDDTを撒くことで虫を殺し、毎年水銀入り米の豊作を告げている。これでは、古米も、古々米も売れのこるのは当然のことであって、粟田を確保するためには、いまの当番政府は、如何にしても、この農民の強引な言い分もきかねばならないのだ。米があまっています米の値が高い。むかしから、あまったものはただ同然ときまっているではないか。悪政の見本のようなものだが、しかし、これも、コンクリートの中で、議事がすすめられて、土についた、真の国家愛にみちあふれた、裁断橋の架橋者の母の心の、爪の垢ぐらい吞ませてやりたい代議士どもによって取りきめられるのだから、致し方もない。政策から精神が欠け、稔りから栄養が欠け、米にも水にも毒物が混る国に、じっとがまんして生きる市民は気の毒というしかない。

生き甲斐を求めて、さまよい歩く青年が、鶴のように、新宿や六本木に現われ、彼らが、みな、言いあわせたように、わが故郷の若狭へむかし、餅もらいにきた、働くことがきらいで零